

先史時代東北アジアの狩猟動物

Prehistoric Animal Remains in Northeast Asia

甲元眞之
KOMOTO Masayuki

はじめに

東北アジアにおける先史時代の狩猟活動を検討しようとするときに、最も困難をきたすのは、遺跡で検出される哺乳動物骨に関する報告事例が極めて少ない点である。また例え出土動物骨の記載があっても、それらの量的分析までには言及したのは、金信奎の詳細な検討以外には（金信奎1970）、ほんに限られているのが現実である。このために、この地域で生活を営んでいた先史時代人の具体的な狩猟活動を把握するのが難しくなっている。かつて東北アジアの先史時代遺跡から検出された自然遺物を検討して、初期農耕文化の生業活動につき、狩猟対象の種とその量的分析に関して論じたことがある（甲元1991）。その後遺跡出土獣類の資料が増加したこともあり、またそこでは具体的な狩猟方法については十分に論じることができなかつたので、ここで改めて東北アジアの狩猟活動について考察を行なうことにしたい。

中国東北部は清王朝発祥の地として18世紀までは漢人の流入が制限され、在来の生活様式がある程度保持されてきたと想定できるが、こうした時期に、あるいはやや遅れて、地方誌（方誌）が数多く編纂されている。こうした方誌には殆ど「物産誌」の項目がたてられ、その地域に見られる一般的な動植物に関する記載がみられる。また清代以前においては、北方への備えとして、この地域に住む民族の動向に並々ならぬ関心が寄せられ、旅行記や訪問記などの形で、文献に残されていて、そうした中には狩猟動物に関する情報も少なからず見ることができる。ここでは近代に綴られた民族誌とともに、こうした文献史料にあたることで、先史時代狩猟活動を復元するための一助としたい。なお海獣類は漁撈活動の一環として論じたほうが適切と考えられるので、ここでは陸上獣類に限って考察することとする。

1. 近代動物学者による哺乳動物

南は燕山山脈、西は蒙古高原、北は黒龍江、東は黄海と日本海によって限られる東北アジアは、遼河、松花江、黒龍江などの大河川流域は草原となり、大小の興安嶺には針葉樹が繁茂する以外の大部分の地域は、モンゴリナラを中心とする落葉広葉樹が優勢な植生となっている（中国科学院自然地理編輯委員会、1885）（第1図）。但し朝鮮南部沿岸地域には照葉樹林の展開がみられる（姜錫午1971）。

東北アジアにおける哺乳動物の棲息調査は、朝鮮が日本の植民地支配を受けていたことから、日本人研究者による調査結果が取り入れられた図鑑があり（黒田1940）、近年これを補綴した動物誌が出版されている（西原1975）。中国東北地方ではルカーシキンによる基礎的調査（ルカーシキン1927）の後に、中国人研究者による総合的な調査がなされ（中国科学院中国自然地理編集委員会1979、高耀亭1987、張榮祖等1997、趙正階1999）、また最近日本人による研究も公表された（西原1998）。ロシア領沿海州に関しては、玉貫光一により戦前の調査を踏まえた動物相の報告がある（玉貫1980）。これ

らを参照しながら、近代における哺乳動物相をみてゆこう。なお齧歯目、食虫目の一部と翼手目は先史時代の狩猟対象とはならず、また遺跡出土の可能性が低いためにこれを割愛した。

偶蹄目

イノシシ科

イノシシ属

チョウセンイノシシ *Sus scrofa coreanus*

トウホクイノシシ *Sus scrofa ussuricus*

ジャコイジカ科

ジャコウジカ *Moschus moschiferus*

シカ科

ウスリージカ *Cervus nippon hortulorum*

マンシュウジカ *Cervus nippon mantchuricus*

トウホクアカジカ *Cervus elaphus xanthopygus*

ノロ *Capreolus capreolus bedfordi*

オオノロ *Capreolus capreolus pygargus*

ヘラジカ *Alces alces*

トナカイ *Rangifer tarandus*

キバノロ *Hydropotes inermis argyropus*

ウシ科

カモシカ属

チョウセンカモシカ *Naemorhedus goral roddeamus*

レイヨウ属

モウコガゼル *Procapra gutturosa gutturosa*

ヒツジ属

アルガリ *Ovis ammon*

シベリアオオツノヒツジ *Ovis nivicola*

食肉目

イタチ科

イタチ属

ケナガイタチ *Mustela eversanni*

ダウリアケナガイタチ *Mustela eversmanni michnoi*

コケナガイタチ *Mustela amurensis*

イタチ *Mustela sibirica*

コウタイイタチ *Mustela nivalis coreana*

マンシュウイタチ *Mustela sibirica manchurica*

モサンコエゾイタチ *Mustela nivalis mosanensis*

タカネイタチ *Mustela altaica*

オコジョ *Mustela erminea*

イイズナ *Mustela nivalis*

テン属

- クロテン *Martes zibellina*
- コウライクロテン *Martes zibellina hamgyenensis*
- キエリテン *Martes flavigula*
- コウライキエリテン *Marets melampus coreensis*
- コウライキテン *Charronia flavigula koreana*

カワウソ属

- カワウソ *Lutra lutra*

ナアグマ属

- アナグマ *Meles meles*
- チョウセンアナグマ *Meles melanogenys*
- モウコノアナグマ *Meles leptorhynchus raddei*

クズリ属

- クズリ *Gulo gulo*

イヌ科

イヌ属

- オオカミ *Canis lupus*
- アカオオカミ *Cuon alpinus*

キツネ属

- アカキツネ *Vulpes vulpes*
- モウコキツネ *Vulpes vulpes dauria*
- スナキツネ *Vulpes corsac*

ホッキョクキツネ属

- ホッキョクキツネ *Alopex lagopus*

タヌキ属

- コウライタヌキ *Nyctereutes procyonides koreenis*
- ウシリータヌキ *Nyctereutes procyonides ussuriensis*

ネコ科

ヒョウ属

- シベリアトラ *Panthera tigris*
- チョウセントラ *Panthera tigris coreensis*
- ヒョウ *Panthera pardus*
- ユキヒョウ *Panthera uncia*

ネコ属

- チョウセンヤマネコ *Felis bengalensis manchurica*
- オオヤマネコ *Lynx lynx cervaria*

クマ科

ツキノワグマ属

- ウスリークマ *Selenarctos thibetanus ussuricus*
- ツキノワグマ *Selenarctos thibetanus*

ヒグマ属

ヒグマ *Ursus arctos laciotus*

齧歯目

ナキウサギ科

ナキウサギ属

シベリアナキウサギ *Ochotona alpina*

トウホクナキウサギ *Ochotona hyperborea*

ダウリアナキウサギ *Ochotona dauria*

ノウサギ属

トウホクノウサギ *Lepus mandchuricus*

コウライノウサギ *Lepus sinensis coreanus*

モウコノウサギ *Lepus tolai*

ケープウノウサギ *Lepus capensis*

ユキウサギ *Lepus timidus*

リス科

リス属

キタリス *Sciurus vulgaris*

チョウセンリス *Sciurus vulgaris coreae*

シマリス属

シマリス *Tamias sibiricus*

ハタリス属

オナガジリス *Citellus undulatus*

ダウリアハタリス *Citellus dauricus*

タルバガン属

タルバガン *Marmota bobak*

モモンガ属

タイリクモモンガ *Pteromys volans*

ムササビ属

マンシュウムササビ *Petaurista watasei*

ネズミ科

キヌゲネズミ亜科

キヌゲネズミ属

ヒメアシキヌゲネズミ *Phodopus roborovskii*

ヒメキヌゲネズミ *Phodopus sungorus*

セスジキヌゲネズミ *Cricetulus barabensis*

オオキネゲネズミ *Cricetulus triton*

モグラネズミ亜科

モグラネズミ属

バイカルモグラネズミ *Myosplax psilurus*

シベリアモグラネズミ *Myosplax aspalax*

アカネズミ属

セスジネズミ *Apodemus agrarius*

アカネズミ *Apodemus speciosus*

クマネズミ属

クマネズミ *Rattus rattus*

ドブネズミ *Rattus norvegicus*

食虫目

ハリネズミ科

ハリネズミ属

ハリネズミ *Erinaceus europaeus*

ウスイロハリネズミ *Erinaceus europaeus amurensis*

ダウリアハリネズミ *Hemiechinus dauricus*

モグラ科

モグラ属

ニオイモグラ *Scaptoehirus moschatus*

2. 民族誌にみる哺乳動物

1. 顎倫春族

大小の興安嶺に居住する顎倫春族についての民族誌は比較的狩猟について多くを我々に知らせてくれる（韓有興1991）。顎倫春族では狩猟対象動物に次のような種がある。

アカシカ、ヘラジカ、ノロ、イノシシ、ツキノワグマ、シベリアトラ、オオヤマネコ、オオカミ、コッサクキツネ、タヌキ、カワウソ、イタチ、キタリス、ノウサギ

顎倫春族の主要な狩猟対象はシカ科で、通年的な狩猟活動が営まれている。中国の古文献によれば、中国東北部においては金代以降テンの狩猟が盛んで、とりわけ明清代には特産物として重宝がられたことが窺えるが、民族誌には記載されることがない。またシカ科も稀少動物として保護対象とする必要が説かれている（趙復興1987）。これらのことは狩猟対象動物が経年的に変遷のあることを示していると言えよう。

2. 『黒龍江志稿』

1887年黒龍江將軍の恩沢は、光緒帝に『黒龍江通志』の編集を願い出たが未着手に終わったのを受けて、1914年黒龍江巡按使の朱慶瀾は通志局を設けて資料の収集にあたり、初稿ができあがった。1933年になって万福麟監修張伯英総編により一通り完成したが、なお「欠略疏漏」があるゆえに、『黒龍江志稿』と称されている。この『黒龍江志稿』の資料の殆どは清代に編纂された東北地方の方志であり、それらの最大公約数の動物相が記載されているとみることができる。これに記載されている野生哺乳動物には次のような種がある。

モウコノウマ、ガウル、ヒツジ、ヤギ、イノシシ、ヤマアラシ、ヤマネコ、ロバ、トナカイ、シフゾウ、ヘラジカ、アカシカ、ノロ、キョン、キバノロ、ヒグ、マトラ、ヒョウ、ドール、オオカミ、アナグマ、キツネ、タヌキ、オオヤマネコ、テン、カワウソ、モンゴルマーモット、モサンコエゾイタチ、キタリス、モグラネズミ、イタチ、リス、タカネイタチ、ヤマネコ、モモンガ、ネズミ、ステップケナガイタチ、ハリネズミ、クズリ、ウサギ

3. 『吉林通志』

『吉林通志』は光緒17年から編纂が始まり、光緒26年（1900）に完成した清代の方誌の一つである。その内容は『盛京通志』を中心として、その他宋代以降の方誌の類から集められたものが多い。現在の吉林省、黒龍江省、沿海州、朝鮮東北部に関する資料が含まれている。野生動物としては以下のものが掲げられている。

モウコノウマ、ガウル、ヤギ、イノシシ、ヒメヤマアラシ、アジアノロバ、ヘラジカ、シフゾウ、アカシカ、トラ、ヒョウ、ヒグマ、ツキノワグマ、キバノロ、キョン、ジャコウジカ、テン、アナグマ、キツネ、コサックキツネ、ヤマネコ、タヌキ、オオヤマネコ、モサンコエゾイタチ。

4. 『盛京通志』

『盛京通志』は康熙年間に最初の編纂がなされた後に、5回に及ぶ改修が行なわれている。以下に使用する版本がいずれの時期のものであるかは、検討できなかった。しかし『吉林通志』よりも遡ることは確実である。

ガウル、モウコノウマ、アジアノロバ、ラクダ、イノシシ、ヤマネコ、ヤギ、カモシカ、ヤマネコ、トラ、ヒョウ、ヒグマ、シフゾウ、アカシカ、ヘラジカ、ノロ、キョン、オオカミ、キバノロ、ジャコウジカ、ドール、アナグマ、タヌキ、オオヤマネコ、キツネ、コサックギツネ、クズリ、テン、モサンコエゾイタチ、キタリス、イタチ、タカネイタチ、モグラネズミ、ハリネズミ、リス、ステップケナガイタチ、ウサギ、ユキウサギ、ミユビトビネズミ。

5. 『大明一統志』

女直の土産に関する条（巻89）には、ウマ、イノシシ、ガウル、トラ、ヒグマ、キツネ、タヌキ、オオヤマネコ、テン等の哺乳動物が掲げられている。それらの大部分は毛皮として貢納されている。

3. 遺跡出土の哺乳動物骨

以下に遺跡で発掘された哺乳動物をみてゆくことにする。なお正式な鑑定を受けた事例は学名を記載し、それ以外は片仮名書きに留めることとする。

a) 東北北部内陸河川地帯

1. 元宝溝遺跡：吉林省農安県

元宝溝遺跡は教宝図泡と呼ばれる湖沼の西側に位置する台地上に立地する新石器時代の集落跡である（吉林省文物考古研究所1989）。出土した土器からすると、左家山遺跡の第1期にやや遅れる時期のものと見られる。動物の骨を素材にしての炭素年代では 6140 ± 175 BP（樹輪校正）である。出土遺物には漁撈具を中心とした骨角器が多く、実際魚骨が多量に検出されている。これに対して狩猟具には鏃があるに過ぎない。家畜にはブタ34頭が出土し、狩猟動物としては以下の種が見られる。

ガウル *Bos gaurus* 6 個体
アカシカ *Cervus elaphus* 28 個体
ノロ *Capreolus capreolus* 43 個体
ジャコウジカ *Moschus moschiferus* 数量不明
オオカミ *Canis lupus* 1 個体
アナグマ *Meles meles* 21 個体
キツネ *Vulpes vulpes* 9 個体

シベリアモグラネズミ *Myosplax aspalax* 数量不明

この遺跡ではシカ科の哺乳動物がとりわけ重要な捕獲対象であったことが窺える。しかし狩猟に使用されるイヌが検出されていないのは、資料の上の問題があるのか。

2. 左家山遺跡：吉林省農安県

左家山遺跡は松花江の支流である伊通河の河岸段丘上に位置する新石器時代の集落址である（吉林大学考古学教研室1989）。狩猟具としては鏃が知られるのみで、この遺跡では漁撈具が卓越している。立地からも漁撈活動への比重がたかかったことが推測される。文化層は3期に区分され、炭素年代により第1期は貝を素材とし6755±115BP（樹輪較正年代ではBC4936～4773年）、第3期は炭化した骨により4870±180BP（樹輪較正年代ではBC2921～2703年）の数値が得られている。

トウホクモグラネズミ *Myospalax* sp. 3 個体

イヌ *Canis familiaris* 2 個体

オオカミ *Canis lupus* 3 個体

ハイイロギツネ *Urocyon cinerreoargenteus* 8 個体

スナキツネ *Vulpes corsac* 1 個体

ホッキョクギツネ *Vulpes lagopus* 1 個体

アナグマ *Meles meles* 2 個体

クズリ *Gulo gulo* 1 個体

ドール *Cuon alpinus* 1 個体

クロテン *Martes zibellina* 1 個体

カワウソ *Lutra lutra* 2 個体

タヌキ *Nyctereutes procyonoides* 1 個体

ネコ *Felis caudata* 2 個体

トラ *Felis tigris* 1 個体

ブタ *Sus scrofa domestica* 8 個体

イノシシ *Sus scrofa* 7 個体

マンシュウノロ *Capreolus capreolus mandchurica* 12 個体

キバノロ *Hydropotes inermis* 6 個体

アカシカ *Cervus elaphus* 2 個体

ウスリージカ *Cervus nippon hortulorum* 6 個体

ジャコウジカ *Moschus moschiferus* 1 個体

ウシ科 *Bos* sp. 3 個体

ウマ科 *Equus* sp. 2 個体

イノシシは老年が多く、ブタは若年が8割を占めることは、基本的には家畜飼育の初期段階にあったことが窺われる。骨数を基に時期別の変遷を見ると、第1期ではシカ科が全体の5割を占めて最も多く、イノシシ・ブタが3割とこれに次ぐ。第2期でもノロを中心としたシカ科の頭数が66%と際立って多く、ハイイロギツネが11%で次いで多い。これが第3期になるとイノシシ・ブタの量的な増加が著しく、全体に占める割合は38%であり、42%のシカ科と匹敵するほどとなる。しかし最小個体数でみると72匹であり、狩猟数としては多いとは言い難い。殆どの狩猟動物は衣服の素材として利用できるものであり、またシカ科は骨角器に使用されるものが多く、むしろそれらの目的のほうが実際

的であったものと思われる。日常の生業活動においては漁撈と採集に依存していた可能性が高いと推測される。

3. 新開流遺跡：黒龍江省密山県

東北地方最大の湖である興凱湖と小興凱湖の間にある台地（崗）に立地する新石器時代の集落と埋葬地で、小興凱湖の増水時には、水はこの台地の西端（新開流）を通過して興凱湖に注ぐ（黒龍江省文物考古工作隊1979）。台地周辺は平原と沼沢が続く環境となっている。この遺跡は上下2層に区分され、うち上層は人骨を素材にした炭素年代で 6080 ± 130 B P（樹輪較正年代）の数値が得られている。哺乳動物の報告がなされたのは上層に属するもので、それらは以下の通りである。

アナグマ *Meles meles*

オオカミ *Canis lupus*

イヌ科 *Canidae* sp

シカ科 *Cervidae* sp

ノロ *Capreolus capreolus*

アカシカ *Cervus elaphus*

シフゾウ *Elaphurus davidianus*

ヒグマ *Ursus arctos*

イノシシ *Sus scrofa*

キツネ *Vulpes vulpes*

ネズミ科 *Muridae* sp.

個体数の計算はなされていないが、ここでは牙床や角で鑑定がおこなわれていて、その総和ではシカ科26と圧倒的に多い。さらに多量に出土した骨角器はシカ科の骨が使用されていて、狩猟対象としてはシカ科が中心であったと推定できる。

4. 大牡丹屯遺跡：黒龍江省寧安県

黒龍江に注ぐ牡丹江の第1段丘上にある集落地で、上下2層のうち下層が新石器時代に属する（黒龍江省博物館1961）。遺物からみると鶯歌嶺遺跡上層と同じ文化層に属すると考えられ、鶯歌嶺上層の炭素年代は 3025 ± 90 b p（樹輪較正年代BC1240 \pm 155）と 2985 ± 120 b p（樹輪較正年代BC1190 \pm 145）と測定されている。狩猟具としては鏃と槍が多く出土している。この遺跡でも骨角で拵えた漁撈具の検出が多い。栽培穀物としてアワ、キビ、ダイズがあり、農耕を営んでいたことは確実である。家畜類にはブタとイヌがあり、狩猟哺乳動物としてはシカ、ノロ、ウサギが報告されている。

b) 東北西部台地

1. 紅山後遺跡：内蒙古自治区赤峰市

紅山後遺跡は赤峰市の東北、なだらかに起伏を繰り返しながら広がる丘陵中に、紅山と呼ばれる海拔690mの小山があり、その北側中腹部に集落と墓地が営まれている。遺跡の西側足下には英金河が北流し、西拉木倫河に注いでいる。東亜考古学会による調査では、紅山文化に属する第2住地と夏家店下層文化に属する第1住地及び夏家店上層文化期の墓地が発掘されている（東亜考古学会1938）。第2住地では、

ウスリージカ *Cervus nippon hortulorum*

マンシュウアカシカ *Cervus elaphus*
マンシュウノロ *Capreolus capreolus mantchricus*
ヒツジ *Ovis* sp.

が見られ、第1住地では、

ブタ *Sus scrofa*
マンシュウアカシカ *Cervus elaphus*
ウシ *Bos taurus*
モウコノウマ *Equus przewalskii*

が検出されている。さらに墓地からは、

イヌ *Canis familiaris*
ブタ *Sus scrofa domestica*
ウスリージカ *Cervus nippon hortulorum*
ウシ *Bos taurus*
メンヨウ *Ovis aries*

この遺跡ではイヌ以外の家畜動物が出現するのは夏家店下層段階であることが示される。

2. 富河溝門遺跡：内蒙古自治区巴林左旗

富河溝門遺跡は大興安嶺の南端、烏爾吉木倫河の東岸丘陵の中ほどに位置し、河面からの高さ25～60mにある新石器時代の集落址で、発掘の結果37基の方形又は円形住居址が検出されている（中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队1964）。住居址内部から出土したシラカバの皮による炭素年代では 5300 ± 145 B P（樹輪較正年代）の数値が得られている。狩猟具として明確なのは鏃だけであり、この他には細石刃が検出されていることから銛が使用された可能性もある。この遺跡で検出された哺乳動物類は以下の通りである（劉・徐、1979年）。

イノシシ *Sus scrofa*
ジャコウジカ *Moschus moschiferus*
ノロ *Capreolus capreolus*
シフゾウ *Elaphurus davidianus*
モウコガゼル *Procapra gutturosa*
キツネ *Vulpes vulpes*
アナグマ *Meles meles*
キタリス *Sciurus vulgaris*
イヌ科 *Canidae* sp.
ウシ科 *Bovidae* sp.

このうちシカ科が出土獣類の半数を占め、イノシシが17%、アナグマ9%でこれに続き、ウシ科は2%に過ぎない。動物学者の鑑定によるが、頭数か骨数かの記述はない。これらの動物相は草原性の奇蹄類は皆無ですべて森林性を示し、現在の草原性景観とは異なっていたことが窺える。また出土遺物の中にも、釣針や銛などの骨製の漁撈具が多く見られること、マンシュウグルミ *Juglans mandschurica* が採集されていることから水量が豊富で、落葉樹林を中心とした生態環境が展開していたことを物語っている。

3. 大山前遺跡：内モンゴ赤峰市喀喇沁旗

大山前遺跡は老哈河上流の半支箭河に注ぐ季節的小河川に面する台地上に点在する集落址で、現在まで6地点での遺跡が確認されている。そのうち第1地点と第4地点の発掘簡報が公にされ、動物遺存体や花粉分析結果は論文の形で公表されている（中国社会科学院考古研究所・内モンゴ自治区文物考古研究所・吉林大学考古系・赤峰考古隊1998、中国社会科学院考古研究所・内モンゴ自治区文物考古研究所・吉林大学辺境考古研究中心・赤峰考古隊2004、王立新2004、齊島雲2005）。

発掘された文化層は小河沿文化、夏家店下層文化、夏家店上層文化、戦国の4時期であり、このうち小河沿文化と夏家店上層文化の堆積層は薄く、夏家店下層文化の層は厚く堆積していたという。発掘された遺構は第1地点で夏家店下層文化期の住居址と土壘、第4地点で夏家店下層文化期の住居址と貯蔵穴、土壘の一部、夏家店上層文化期の貯蔵穴と埋葬土壘が検出されている。報告された動物骨がどのような考古学的性格のものであるかという記述がないために、どこまで一般化できるかわからない。

王立新による報告では夏家店下層文化期では、骨数2145個のうち、ブタ42.8%、ウシ24.3%、ヒツジ15.3%、イヌ10.9%で、夏家店上層文化期では骨数162個のうち、ブタ59.9%、イヌ12.96%、ヒツジ12.96%、ウシ11.73%、戦国期では骨数1351の中で、ブタ46.1%、ウシ19.8%、イヌ16.9%、ヒツジ14.4%、ウマ2.5%、キョン2、アナグマ2、アカシカ1、クマ1である。%で表現されているのは家畜動物であり、狩猟動物は個体数と思われる。夏家店上層と下層の家畜動物の比率は、狩猟動物の鑑定がないことから、むしろ埋葬に伴ったものが多いのではないかと推測される。

4. 水泉遺跡：遼寧省建平県

水泉遺跡は、大凌河の支流の老虎山河が貫流する緩やかな起伏が続く熱河台地の中にあり、東側には枯れることない泉に接している。遺跡は層位により3層に区分され、下層は夏家店下層文化段階に、中層は戦国期に比定できる（遼寧省博物館・朝陽市博物館1986）。炭素年代では下層は4130±110BC（樹輪校正年代）、中層のアワを素材にした年代は2510±100BC（樹輪校正年代）である。狩猟具には骨製鏃以外にはみあたらない。下層段階で古骨としてウシ、イノシシ、ヒツジの肩甲骨が使用されているのが注目される。動物骨の報告は張鎮洪によりなされている（張鎮洪1989）が、必ずしも層位的に記述がなく、不十分な論及に留まっている。ここで出土した哺乳類には、ウスリージカ、ノロ、キバノロ、ドール、ダウリアハタリス、イヌ、ブタ、ウシ、ウマ、メンヨウ、ヤギなどがみられ、個体数ではブタ87、イヌ37、ウシ31、羊20、ウマ4となっている。このうち家畜と認定されたメンヨウ、ウシ、ウマはいずれも戦国期である。またブタに関しても大多数が幼年と老年であることから張は狩猟対象と想定している。しかし、年齢構成からすると、ブタ認定しても良いであろう。むしろこの段階でシカ科の比重が低下していることが重要な点である（大貫1995年）。

5. 南山根遺跡：遼寧省寧城県

南山根遺跡は老哈河の上流、崑都倫河の上源近くの小丘陵上に立地し、遺跡付近は山塊に挟まれた小盆地状をなしている（中国社会科学院考古研究所内モンゴ工作隊1975）。遺跡は夏家店下層文化段階の集落址と上層文化段階の集落址と墓地で構成されている。上層段階では、

ブタ *Sus scrofa domestica*

イヌ *Canis familiaris*

ウシ *Bos taurus*

ヒツジ *Ovis domestica*

ウスリージカ *Cervus nippon hortulorum*

ウマ *Equus cafallus*

ウサギ *Lepus* sp.

キツネ *Vulpes* sp.

が見られ、イヌとブタの頭数が比較的多く、ブタは皆幼年と成年の年齢構成となっている。下層段階では

ブタ *Sus scrofa domestica*

イヌ *Canis familiaris*

ウシ *Bos taurus*

ヒツジ *Ovis domestica*

ウスリージカ *Cervus nippon hortulorum*

がある。下層段階ではブタの個体数が比較的多く、それらは幼年よりも成年のものが多くと報告されている。

6. 大井古銅鋳遺跡：内蒙古自治区林西県

大井古銅鋳遺跡は夏家店上層文化段階の採銅遺跡であり（遼寧省博物館文物工作隊1983）、遺構として採掘にかかわる3基の住居址、製作所及び採銅址が検出されている。出土動物骨は採掘にかかわった人々の食料と推定され、骨には破碎痕や焼痕が認められるという。発見された哺乳動物は種類のみ列記されている。それらにはシカ、キョン、ヤセイウマ、ヤギユウ、ヒツジ、オオカミ、キツネ、イヌ、タヌキ、ノウサギ、クマなどが見られる。

c) 遼東沿岸部

1. 郭家村遺跡：遼寧省大連市

郭家村遺跡は遼東半島先端部に聳える老鉄山の西斜面、海拔が約60mの沿岸台地上に立地する集落址と貝塚である（遼寧省博物館・旅順博物館1984）。遺跡は上下2層に区分され、下層は小珠山中層に、上層は小珠山上層に並行する時期のものと想定される。炭素年代は木炭とアワでなされ、下層は 4870 ± 100 BPと 5015 ± 100 BP、上層は 4180 ± 90 BPと 4060 ± 90 BP（いずれも未補正）との数値が得られている。

出土した哺乳類は下層では、

ブタ *Susu scrfa domestica*

イヌ *Canis familiaris*

ウスリージカ *Cervus nippon hortulorum*

ノロ *Capreolus capreolus*

ジャコウジカ *Moschus moschiferus*

アナグマ *Meles meles*

ジャングルキヤット *Felis chanus*

この中でブタは88個体と最も多く、イヌが11個体、ウスリージカ19個体、ジャコウジカ4個体、ノロ1個体で、シカ科は全体の2割を占めるに過ぎない。上層では、

ブタ *Sus scrfa domestica*

イヌ *Canis familiaris*
ウスリージカ *Cervus nippon hortulorum*
キバノロ *Hydroptes inermis*
アカシカ *Cervus elaphus*
ノロ *Capreolus capreolus*
ジャコウジカ *Moschus moschiferus*
アナグマ *Meles meles*
ジャングルキヤット *Felis chaus*
ヒョウ *Panthera pardus*
クマ科 *Ursus sp.*
タヌキ *Nyctereutes procyonoides*
ネズミ科 *Rattus rattus*

上層ではブタが出土総数の約5割を占め最も多く、シカ科は併せて1/3に達しているのに反して、イヌは8個体と全体の4%弱を占めるに過ぎない。

2. 羊頭窪遺跡：遼寧省大連市

遼東半島先端部の西側鳩湾に面する台地上に形成された双聖子第3期の貝塚を伴う集落址である(東亜考古学会1942)。検出された哺乳動物には以下のような種がある。

オオカミ *Canis lupus*
イヌ *Canis familiaris*
タヌキ *Nyctereutes procyonoides*
アナグマ *Meles meles*
ドブネズミ *Rattus norvegicus*
ノウサギ *Lepus mantshuricus*
イノシシ *Sus continentalis*
ブタ *Sus sp.*
マンシュウジカ *Cervus nippon mantchuricus*
ウスリージカ *Cervus nippon hortulorum*
マンシュウアカシカ *Cervus elaphus*
ノロ *Capreolus capreolus*
ジャコウジカ *Moschus moschiferus*

出土野獣類の中では、タヌキ、ジャコウジカが多く、家畜ではイヌとブタが多い。アシカは小型で1頭であろう。

3. 大嘴子遺跡：遼寧省大連市

大嘴子遺跡は大連湾内の最北奥に扇形に突き出た半島の付根部分に存在する双聖子第3期文化の集落址である(大連市文物考古研究所2000)。海拔が約10mの台地上に集落を構え、その周辺に薄い貝層が部分的に散在している。炭素年代は第3期の事例で穀物を素材としたもの、 3090 ± 110 BP(較正年代)、木炭では 3365 ± 145 BP(較正年代)が知られていて、紀元前千年紀に属することが分かる。狩猟具としては石鏃37点と石槍6点があるに過ぎず、この遺跡では漁撈具の出土が卓越している。検出

された哺乳類は次の通りである。

イヌ *Canis familiaris*

ネコ *Felis* sp.

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

ブタ *Sus scrofa domestica*

アカシカ *Cervus elaphus*

ウスリージカ *Cervus nippon hortulorum*

キバノロ *hydropotes inermis*

ジャコウジカ *Moschus moschiferus*

ノロ *Capreolus capreolus*

ヒツジ属 *Naemorhedus* sp.

これらの中でブタが30個体と最も多く、出土総数の42%を占め、次いでイヌが14%、シカ科をあわせて19%に過ぎない。家畜動物が断然優位であることを示すが、シカ科の骨は多く道具に使用されていて、本来的にはもっと多くの頭数があったことが予想される。

4. 小珠山遺跡

小珠山遺跡は遼東半島の東側に位置する長山列島中にある広鹿島の中央に海拔20mほどの山腹に営まれた貝塚で、戦前よりいくつかの試掘がおこなわれていた（三宅俊成1957）。1957年以降遼寧省博物館などのより本格的な調査がなされ、長山列島の代表的な自然遺物の動向を掴む事が可能となった（遼寧省博物館・旅順博物館・長海県文化館1981年）。文化層は上中下の3層に区分され、この地域の先史文化の標識遺跡とされている。炭素年代では以下の数値が得られているが、いずれも未補正年代である。

5015 ± 100bp、4020 ± 90bp、4110 ± 90bp、4180 ± 90bp、3960 ± 70bp

検出された哺乳動物には以下のような種がある。

クマネズミ *Rattus rattus*

イヌ *Canis familiaris*

アナグマ *Meles meles*

ヒョウ *Panthera pardus*

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

ヤマネコ *Felis chao*

オオカミ *Canis lupus*

クマ *Ursus* sp.

ブタ *Sus scrofa domestica*

ウスリージカ *Cervus nippon hortularum*

アカシカ *Cervus elaphus*

キバノロ *Hydropotes inermis*

ノロ *Capreolus capreolus*

ジャコウジカ *Moschus moschiferus*

キョン *Muntiacus* sp.

クジラ目 *Cetacea* sp.

下層では鹿が最も多く、キバノロとイヌがこれに次ぐ。中層では鹿が最も多く、ブタがこれに次ぎ、上層ではブタが最も多くなるとされる。シカ科の狩猟からブタ飼育への変遷をたどることができ、大貫が指摘するようにシカ科の狩猟とブタ飼育が反比例することが窺える（大貫1995年）。

d) 沿海州内陸部

1. チェリトヴィボロータ遺跡：

チェリトヴィボロータは沿海州南部、シホテアリン山脈の東南裾に営まれた新石器時代の洞窟遺跡である（Andreeva1991）。炭素年代によりその時期は約6800～5900BPと想定されている。ただしこの遺跡では出土地点と層位により時代幅があることが考えられるので、新石器時代の前半期と想定しておく。ここで検出された哺乳動物には次のような種がある。

オオカミ *Canis lupus*

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

クマ（ツキノワグとマヒグマ） *Ursus actos, Ursus tibetanus*

カワウソ *Lutra lutra*

イタチ *Mustella sibirica*

アナグマ *Meles meles*

トラ *Panthera tigris*

イノシシ *Sus scrofa*

ヘラジカ *Alce alce*

ノロ *Capreolus capreolus*

アカシカ *Cervus elaphus*

ニホンジカ *Cervus nippon*

ジャコウジカ *Moschus moschiferus*

ゴール *Naemorthaedus goral*

ウサギ目 *Leporidae* sp.

これらの中で個体数が算出されているのは、タヌキ9、クマ54、アナグマ30、イノシシ16、アカシカ5であり、クマが多く狩猟されていることが顕著である。

2. クロウノフカ1遺跡

クロウノフカ1遺跡は沿海州ウスリースク市東南約30kmのクロウノフカ川中流河岸段丘上に形成されたクロウノフカ文化とザイサノフカ文化に属する集落址で、新石器時代住居址内部からノロ *Capreolus capreolus* の下顎骨6点が検出されている（Komoto et Obata2004）。

e) 日本海沿岸部

1. ボイスマンI遺跡

ボイスマンI遺跡はピョートル大帝湾に望む低い丘陵上に形成された新石器時代中期から後期にかけての集落遺跡で、中期に属する遺構や遺物が主体となっている。豊富な漁撈具と魚骨が検出され、沿岸部での代表的なこの時期の遺跡とすることができる（Vostretsov, 1998）。哺乳動物は細かな層位により区分されて報告がなされているが、土器編年との対応が必ずしも充分でないために、ここでは中期に一括して扱うことにする。

イヌ *Canis familiaris*
オオカミ *Vulpes vulpes*
タヌキ *Nyctereutes procyonoides*
カワウソ *Lutra lutra*
アナグマ *Meles meles*
イタチ *Mustela sibirica*
イノシシ *Sus scrofa*
シカ科 *Cervidae* sp.
ノロ *Capreolus capreolus*
アカシカ *Cervus elaphus*

これら出土哺乳類の最小個体数は、イヌ6、オオカミ3、タヌキ7、カワウソ1、アナグマ3、イタチ1、イノシシ17、シカ科10、ノロ16、アカシカ18となっている。ここではシカ科が出土獣類全体の5割を占め、主たる狩猟対象であったことを窺わせる。

2. ザイサノフカ3遺跡

ザイサノフカ3遺跡はボイスマン遺跡から南に下ったエクスペディシア湾の最奥部のグラドカヤ川を望む低い台地上に形成された新石器時代中期の集落遺跡で (Vostretsov1998)、年代的にはボイスマンよりも時期的に新しく位置づけられ、紀元前四千年紀後半期から三千年紀前半期に相当する。ここでは以下のような哺乳動物骨が検出されている。

ウサギ目 *Lepus* sp.
イヌ *Canis familiaris*
カワウソ *Lutra lutra*
クマ科 *Ursus* sp.
イノシシ *Sus scrofa*
ブタ *Sus scrofa domestica*
ジャコウジカ *Moschus moschiferus*
ノロ *Capreolus capreolus*
アカシカ *Cervus elaphus*

それぞれの個体数はウサギ1、イヌ4、カワウソ2、クマ科2、イノシシ3、ブタ1、ジャコウジカ1、ノロ13、アカシカ6であり、出土哺乳類の6割をシカ科で占めている。ブタがこの時期に登場することは注目される。

3. ザイサノフカ7遺跡

ザイサノフカ7遺跡はエクスペディシア湾の沿岸に形成された砂丘上にあり、背後グラドカヤ川が注ぐ広いラグーンとなっている。かつて滑走路に改変されたために、砂丘の元の形状は留めていないが、沿岸部付近ではその痕跡を見出すことができる。貝塚を形成する面は海拔が5 m前後あり、最大海進期においてもグラドカヤ川あたりまでは、砂洲は連続していたと思われる。

この遺跡は2000年ボツレツォフにより試掘調査がなされ、新石器時代の自然遺物を豊富に包含していることが判明したために、日露の共同調査が実施された (Komoto & Obata, 2005)。発掘調査の結果、新石器時代後期の文化層とヤンコフスキー文化期の遺物と埋葬址が検出されている。新石器時代

後期の文化層からは、イノシシ、アカジカ、ニホンジカ、ノロジカ、イヌの骨が検出されている。うちアカジカは頗る大型で頭数が最も多い。貝類の95%はカキであり、高緯度地方の貝塚との共通性を見せている。

4. 西浦項貝塚

西浦項貝塚は、朝鮮東北部豆満江河口右岸にある小さな山塊の南側中腹に立地する、新石器時代前期～青銅器時代に及ぶ貝塚を伴う集落址である（金用・徐国泰1972）。この遺跡では新石器時代中期以降、農耕関係遺物が少しずつ付加されてゆき、青銅器時代に農耕関係の石器組成が完成をみる。狩猟具としては石鏃がすべてであるといっても過言ではなく、豊富に出土する漁撈具との差は極めて顕著である。出土哺乳類は金信奎により詳しく検討がなされている（金信奎1970及び1990）。動物相は新石器時代と青銅器時代に区別して頭数の報告があり、今それを掲げると次ぎのとおりである。

	新石器時代	青銅器時代
ノウサギ <i>Lepus mantchuricus</i>	4	7
カワウソ <i>Lutra lutra</i>	5	3
コウライアナグマ <i>Meles meles</i>	15	18
クロテン <i>Martes flavigula</i>	2	1
イタチ <i>Mustela sibirica</i>		1
ヒグマ <i>Ursus arctos</i>	4	5
コウライキツネ <i>Vulpes vulpes</i>	13	29
オオカミ <i>Canis lupus</i>		2
タヌキ <i>Nyctreutes procyonoides</i>	29	42
イヌ <i>Canis familiaris</i>	63	56
チョウセンヒョウ <i>Felis pardus</i>	2	1
オオヤマネコ <i>Felis lynx</i>		1
ヤマネコ <i>Felis euptylura</i>	18	10
ネコ属 <i>Felis sp.</i>	2	3
イノシシ <i>Sus scrofa</i>	87	118
ブタ <i>Sus scrofa domestica</i>	5	12
ノロ <i>Capreolus capreolus</i>	239	179
ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>	53	21
マンシュウアカシカ <i>Cervus elaphus</i>	145	107
チョウセンカモシカ <i>Naemorhedes goral</i>		2

西浦項貝塚出土陸上獣類の中では、シカ科が最も多く狩猟対象となったことは明瞭で、新石器時代では64%、青銅器時代では50%に達している。シカ科の中でも頭数としてはノロが多いものの、アカシカの体重はノロの5～6倍に及ぶので、西浦項遺跡を営んだ人々にとっては実質的にはアカシカが主要なターゲットであったことは容易に理解できる。家畜動物のうちブタの占める割合は微々たるものであり、イヌが新石器時代層と青銅器時代層でそれぞれ約9%と安定してやや高い比率を占めるのは、狩猟犬としての役割を担ったことの反映であろう。ゴマフアザラシ、トド、クロアシカ、オットセイ、スナメリ、セミクジラ等の海獣類はこの遺跡で出土した哺乳類の15%と13%を占めるにすぎないが、得られる肉量からすると、シカ科を凌駕するものであり、この遺跡における狩猟対象は海獣類

とシカ科の動物であったことが判明する。青銅器時代にはいり農耕を本格的に営んだとされる遺跡においても（黄基徳1970）、出土する狩猟動物相と量にさしたる変化は無く、生業活動の上においては依然として狩猟が重要な位置を占めていたことを窺わせる。

5. 農圃遺跡

農圃遺跡は清津市の標高が30mほどの小丘上の斜面に形成された新石器時代後期の貝塚遺跡で、かつては油坂貝塚と呼称されていた（朝鮮社会科学院考古研究所1954）。出土遺物の中では狩猟具は鏃以外にはみられないのに対して、石製農具が完備し、漁撈具も豊富に認められる。出土した獣類には以下のような種がある。

ノウサギ *Lepus mantchuricus*

キタリス *Sciurus vulgaris*

ドブネズミ *Rattus norvegicus*

キツネ *Vulpes vulpes*

オオカミ *Canis lupus*

カワウソ *Lutra lutra*

トラ *Felis tigris*

イノシシ *Sus scrofa*

ジャコウジカ *Moschus moschiferus*

ノロ *Capreolus capreolus*

マンシュウアカシカ *Cervus elaphus*

チョウセンカモシカ *Naemorhedus goral*

この遺跡ではノロとアカシカが最も多く、シカ科で狩猟動物の半数以上を占めている。オットセイやアザラシなどの海獣類も多く、西浦項貝塚の新石器時代と同様の狩猟活動が営まれていたことが窺える。

6. ペスチャヌイ遺跡

ペスチャヌイ遺跡はウラディオストック湾の入り口近くの右岸にあり、扇型に突き出た岬の中腹部に立地している初期鉄器時代の集落址である（Okladnikov1963）。貝層は放棄された住居址に堆積したものであり、新石器時代のそれとは区別できる。狩猟具としては石製の鏃や槍がある。打製の耕起具、磨製の収穫具、それに石皿・磨石と農耕具が一式見られるものの、量的には少なく、出土遺物の中では漁撈関係遺物が圧倒的に多い。この遺跡で検出された陸上獣類は下記の通りである。

イヌ *Canis familiaris* 74個体

ブタ *Sus scrofa domestica* 76個体

ウシ *Bos taurus* 2個体

ヘラジカ 2個体 *Alces alces*

マンシュウアカシカ *Cervus elaphus* 16個体

ノロ *Capreolus capreolus* 17個体

ジャコウジカ *Moschus moschiferus* 1個体

イノシシ *Sus scrofa continentalis* 6個体

ヒグマ *Ursus arctos* 3個体

アムールアナグマ *Meles meles amurensis* 3 個体

イタチ *Mustela sibirica* 2 個体

キツネ *Vulpes vulpes* 1 個体

ドブネズミ *Rattus norvegicus caraco* 5 個体

ペスチャヌイ遺跡においては出土した動物の中で、家畜が74%と圧倒的多数を占め、それに対して従来狩猟動物の約半数に達していたシカ科は17%に過ぎない。海獣類も少ないが、タラをはじめとする魚類の骨が検出されていて、多量の漁撈具の出土を勘案すると、青銅器時代には農耕と漁撈に生業の比重が移ったことも想定できよう。

7. 草島貝塚

草島貝塚は羅津湾を塞ぐように、沖合い7 kmに浮かぶ大草島の北側尾根に沿って形成された青銅器時代から鉄器時代の集落址である（朝鮮民主主義人民共和国科学院1955）。出土遺物には結合式釣針をはじめとして多数の漁撈具が見られる他に、農耕関係石器も少なからず発掘されている。検出された陸上哺乳類には下記の種がある。

イヌ *Canis familiaris*

ブタ *Sus scrofa domestica*

ウシ *Bos taurus*

ノウサギ *Lepus mantchuricus*

キツネ *Vulpes vulpes*

イノシシ *Sus scrofa*

ジャコウジカ *Moschus moschiferus*

ノロ *Capreolus capreolus*

ニホンジカ *Cervus nippon*

マンシュウアカシカ *Cervus elaphus*

チョウセンカモシカ *Naemorhedus goral*

草島遺跡では出土した陸上哺乳類の中で家畜（ブタ、イヌ、ウシ）3種の占める割合は、頭数で42%と約半数であり、家畜に対する依存度が新石器時代に比べて強まったことが分かる。

f) 北朝鮮内陸部

1. 虎谷洞遺跡：咸鏡北道茂山郡

虎谷洞遺跡は豆満江中流域の河谷平野に接する低位段丘上に立地する新石器時代から初期鉄器時代にかけての集落址である（黄基徳1975）。新石器時代層からは伐採用の石斧、耕起用の石鋤がみられ、青銅器時代ではこれに石庖丁が加わり、農耕石器の組成が完成するとともに、アワ、モロコシやキビなどの穀物の出土が確認されるようになる。新石器時代層から検出された哺乳動物については、記述的な記載がされていないために、金信奎の論文の数値を引用することとする（金信奎1790年）。この遺跡の新石器時代層から8種動物の57点の骨が出土したが、ブタが7%、イヌが7.4%と勝ち駒比重は小さく、最も多いのはイノシシで、頭数では23.63%、ジャコウジカは18.52%、ノロとアカシカがそれぞれ11.11%を占めている。

青銅器時代層ではブタとイヌの総計は頭数で46.2%を占めるのに対して、ノロ、アカシカなどの比重が徐々に低下していくことが示されるという。この時期注目すべきはクロテンの狩猟がはじまり、

その頭数の出土全哺乳類の中で9.6%にも達することである。家畜動物の増加による食料獲得の安定化が、毛皮の入手などの狩猟目的の変化をもたらしたことも想定できる。

初期鉄器時代層では狩猟動物の総頭数は出土哺乳動物全体の40.9%と半数以下になり、家畜動物が6割近くに達するようになる。それとともにシカ科の中では最も肉量の多いアカシカに狩猟対象が集中し、クロテン、アナグマ、ウサギなど毛皮を提供する動物の増加がみられることは、農耕生活の順調な発展を物語るものと言えよう。

2. 五洞遺跡：咸鏡北道会寧郡

五洞遺跡は豆満江の支流である会寧川下流にある河谷平野を望む低位段丘上に立地するもので、青銅器時代から鉄器時代にかけての集落址が発掘されている（朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学及民俗学研究所1959）。土器の面では青銅器時代と鉄器時代ではさほどの変化はなく、深鉢形の大中小をもって器種とするもので、石器には黒曜石製の鏃や刃器、搔器があり、石斧、石鋏、石庖丁、擦石や擦臼なども完備している。また穀物としてアワ、アズキ、ダイズなどが検出されている。ここで発掘された哺乳動物には以下のような種がある。

ノウサギ *Lepus manchuricus*

アナグマ *Meles meles*

クマ科 *Ursidae* sp.

イヌ *Canis familiaris*

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

イノシシ *Sus scrofa*

ブタ *Sus scrofa domestica*

ノロ *Capreolus capreolus*

マンシュウアカシカ *Cervus elaphus*

ウシ *Bos taurus*

チョウセンカモシカ *Naemorhedus goral*

ウマ? *Equus* sp.

青銅器時代層では51頭分の哺乳動物が出土している。このうちまとめて検出された8号住居址の動物をみてゆくと、ノロが23頭で57.5%、イノシシが15%、アカシカとアナグマがそれぞれ10%となり、狩猟対象動物の種が次第に限られる傾向にある。鉄器時代層では、6号住居址から出た動物26頭のうち野生動物は19頭で、これは全出土動物の73.1%にあたり、一転して狩猟動物が増加する数字が示されている。狩猟動物の中ではノロが頭数にして8頭で30.77%、アカシカが7頭で26.9%、イノシシは2頭で7.7%に過ぎない。家畜動物のもつ比重が減少することは些か不思議ではあるが、狩猟対象として効率の良いアカシカが増加していることは注目される。

3. 美松里洞遺跡：平安北道義州郡

美松里洞窟は鴨緑江に注ぐ漢川の下流にある小盆地を望む石灰岩の洞窟遺跡である。

(金用珩1963)。青銅器時代層では哺乳動物の中の71%が野生動物で、シカ科が全体の3割を占め、そのなかでもニホンジカが最も多く、シカ科の1/3に達する。新石器時代層ではノロとニホンジカで出土総数の2/3を占めていたものが、青銅器時代になるとシカ科の動物が減少し、反対にブタ22.6%と増加したことが知られる。家畜動物の増加がシカ科の狩猟数を減らし、その中でもより小さ

いノロが減少し、より肉量の多いニホンジカに狩猟対象が移行したことを示している。

4. 立石里遺跡：平壤市勝湖区

美松里遺跡が山間の盆地に立地するのに対して立石里は大同江下流の沖積平野中に営まれた青銅器時代の集落遺跡である（李元均・白龍奎、1962）。ここでは家畜動物としてブタとウシが出土し、全頭数のそれぞれ8.6%と5.7%を占めている。野生動物の中ではアナグマが11頭ともっとも多く、キバノロ8頭、ニホンジカ4頭と続き、残りはアナグマ、イタチ、カワウソなどである。アナグマ、イタチ、カワウソなどの毛皮供給の動物が全体の1/3以上に達することは注目され、これにクマなどを加味すると野生動物の2/3近くがこれらで占められることとなる。立石里遺跡は後に楽浪郡の中心地であり、衛満以前にも政治的な中心地であったことを考慮すると、これらは食料とするよりも交易用として齎された可能性が高いと推測される（甲元1973）。

g) 西朝鮮沿岸部

弓山貝塚：平安南道温泉郡

弓山貝塚は西朝鮮の広梁湾に面した海拔が20mほどの小弓山と称される給料の上にあり、海進時期には裾まで海水の影響を受けたとおもわれる低地が眼前に広がっている朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学及び民俗学研究所1961)。ここでは新石器時代中期の住居址5軒が発掘され、少量ではあるが農耕関係遺物も出土している。この貝塚で検出された動物骨はイヌ、スイギュウ各2頭を除けばすべて野生種で、中でもシカ科に属する哺乳類が頭数で全体の74.3%を占めている。シカ科の中ではニホンジカ3割、キバノロ4割にも達し、ノロも見られる。ニホンジカノ下顎骨は83点も出土している。イノシシは2割ほどで、その他には、イヌ、ヒョウ、アナグマもみられる。弓山遺跡の出土遺物は調査後戦争の被害に遭遇し一部資料が散逸していることから、動物組成は完全ではない可能性もある。

h) 南朝鮮沿岸部

1. 古南貝塚

古南貝塚は忠清南道西部沿岸にある安眠島の沿岸台地上に立地する新石器時代後期から青銅器時代前期にかけての貝塚を伴う集落址である（漢陽大学校博物館1990～97）。新石器時代後期の炭素年代は 3130 ± 60 bpで、青銅器時代層は 2540 ± 50 bpとの数値がえられている。

ネズミ *Rattus* sp.

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

アナグマ *Meles meles*

キツネ *Vulpes vulpes*

ツシマヤマネコ *Felis bengalensis mandchurica*

ブタ *Sus scrofa domestica*

イヌ *Canis familiaris*

イヌ科 *Canis* sp.

ニホンジカ *Cervus nippon*

ジャコウジカ *Moschus moschiferus*

新石器時代と青銅器時代の哺乳動物が区別して報告していないために、時期的な狩猟動物の推移は

不明である。狩猟道具としては石鏃が挙げられるのみである。

2. 煙台島遺跡

煙台島遺跡は韓国南海域にある小さな島にある新石器時代前期から中期にかけての貝塚を伴う遺跡で（国立晋州博物館1993）、魚類や海獣類が豊富に検出されている。

クマネズミ *Rattus* sp.

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

イタチ *Mustela sibirica*

イヌ *Canis familiaris*

テン *Martes sibirica*

アナグマ *Meles meles*

カワウソ *Lutra lutra*

ウマ *Equus caballus*

イノシシ *Sus scrofa*

キバノロ *Hydropotes inermis*

ニホンジカ *Cervus nippon*

ウシ *Bos taurus*

ウシやウマの骨があることは後世の混入とも考えられる。狩猟動物の個体数は少ないらしく、また骨の部位も部分的であることから、本土からの持込であることが想定されている。

3. 上老大島

上老大島遺跡は韓国南海岸にある周囲が7 kmほどの小さな島に営まれた新石器時代前期の貝塚である（孫宝基1982）。生態環境からも海産食料への依存度が高かったことが窺える。実際多量の魚・海獣類の骨と漁撈具が豊富に出土している。

イノシシ *Sus scrofa* 4 個体

キバノロ *Hydropotes inermis* 2 個体

ニホンジカ *Cervus nippon* 6 個体

ウスリージカ *Cervus nippon hortulom* 7 個体

カワウソ *Lutra lutra* 4 個体

キツネ *Vulpes vulpes* 4 個体

イヌ科 *Canis* sp. 1 個体

セスジネズミ *Apodemus agrarius* 1 個体

ドブネズミ *Rattus norvegicus* 11 個体

4. 朝島貝塚

朝島貝塚は釜山港の入り口近く、東三洞貝塚に相対する場所にある周囲18kmの小島の北側沿岸台地上にある初期鉄器時代の貝塚を伴う集落址で（国立中央博物館1976）、西南側60m離れて新石器時代の貝塚が存在している。出土した哺乳動物はブタ、ニホンジカ、ウスリージカの3種で、中でもニホンジカの数が圧倒的に多く、ために朝島がシカの養鹿場であった可能性が示唆されている。

5. 水佳里貝塚

水佳里貝塚は金海平野にある海拔241mの錦屏山を中核とする小さな山塊で、遺跡形成当時は金海湾に浮かぶ小島であった。貝塚はこの錦屏山の東側裾部に3ヶ所に分かれて分布している（釜山大学校博物館1981）。貝層は3時期に層位的に区分され、上層は新石器時代後期末、中層は後期、下層は新石器時代中期に比定されている。

イヌ *Canis familiaris*

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

ヒグマ *Ursus arctos*

アナグマ *Meles meles*

ヤマネコ *Felis bengalensis*

イノシシ *Sus scrofa*

キバノロ *Hydropotes inermis*

ニホンジカ *Cervus nippon*

この他にウシが発見されているが、後世のものであろう。イヌは攪乱層からの出土である。タヌキは2個体、クマは1個体、アナグマ3個体？、イノシシは8個体、ニホンジカ10個体、キバノロ3個体となっている。南海岸地域でもイノシシとシカが主要な狩猟対象動物であったことに変わりはない。

6. 東三洞貝塚

東三洞貝塚は釜山港入り口の岬状に延びた丘陵の裾部分に立地する新石器時代の貝塚遺跡である。戦前より何回にもわたって発掘調査がおこなわれ、自然遺物を豊富に出土しているものの（横山1933、及川1933）、それに関する報告は充分ではなく、現在はサンプルの調査報告以外の様相は不明のままである（Sample1974）。

イノシシ *Sus scrofa*

ニホンジカ *Cervus nippon*

キバノロ *Hydroptes inermis*

マンシュウアカシカ *Cervus elaphus mandchuricus*

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

イヌ *Canis familiaris*

この遺跡では海獣類の出土が多く、また魚類も多量に検出されている。陸上哺乳動物の出土はあまり多くはないようである。

4. 先史時代東北アジアの狩猟動物の推移

先史時代東北アジアの遺跡で検出される狩猟対象動物と中国の古文献に記載された狩猟対象動物の間では必ずしも一致しない点が多い。とりわけテンなどの特産物に関しては、むしろ商業経済との関連性が強いものであり、先史時代の一般的な狩猟活動とは弁別する必要がある。ここでは先史時代遺跡から検出される狩猟対象動物の時期的推移を検討して、日常生活必需品から特産物への転化の過程を検証することにする。

東北部内陸河川地帯では新石器時代を通して、シカ科の獣類が主たる狩猟対象であった。元宝溝遺跡では出土哺乳類のうちシカ科は72%であり、これにオオカミ、アナグマ、キツネ、シベリアモグ

ラネズミなどの毛皮に供される動物が31%に達している。左家山遺跡ではイヌ、ブタの家畜動物が13%であるのに対してシカ科は35%、毛皮動物は26%となっている。新開流遺跡でもシカ科が圧倒的に多い。シカ科の動物の骨は骨角器に使用されることが多いことから、基本的にはこの地域ではシカ科が狩猟対象の中心であったことは疑いえない。出土する魚骨や豊富な漁撈具からすると、東北北部内陸河川地帯ではシカ科の狩猟と河川漁撈が新石器時代においては生業の中核となっていたとすることが可能である。

中国東北西部のいわゆる「熱河台地」とその周辺地帯では、紅山文化段階ではシカ科の狩猟数が比較的多いものの、草原性の動物が少数見られ、夏家店下層段階になるとシカ科に代わって草原性動物が優位となり、夏家店上層段階に入ると森林性のシカ科動物が減少することが窺える。石製農具の組み合わせをみると、夏家店下層文化段階では石鋤、石鍬、石包丁、石皿がセットになるのに対して、夏家店上層文化段階では石鋤がなくなる。石鋤は深耕するための農具であり、厚く堆積した腐食土壌を対象とするものであることから、これが無くなることは、腐食土壌の補充ができなくなった状況を示唆している（甲元1989）。寒冷乾燥化現象のために森林が後退し、草原の状況に変化したこと、それに対応するためのヒツジの増加は、森林の生育を妨げるために、草原状態を一層加速させたことを物語っている。このことは狩猟・家畜飼育と農耕栽培が生業の基本形態であった夏家店下層文化段階から次第に農耕の要素が少なくなり、夏家店上層文化段階では家畜飼育に依存する牧畜的要素の拡大と変化していきつつあったことを示しているといえよう。

遼東半島沿岸部では紀元前2000年紀にはコメやアワの栽培を営んでいたが、豊富な海産食物に恵まれ、むしろ漁撈活動が活発であったことが出土する魚骨と発達した漁撈具により示されている。哺乳動物も狩猟範囲が広く、特定種に偏ることはない。このことは朝鮮半島南部沿岸地域でも同様のことが指摘できそうである。

朝鮮の内陸地帯では北朝鮮の新石器時代から青銅器時代の遺跡では、特徴的にブタの飼育が盛んで、これに各種のシカ科が加わる。沿岸部地域にみられる漁撈活動の代わりに、より陸上動物に対する依存度が高いことを示している。沿海州南部から北朝鮮の沿岸部に立地する遺跡では、共通して海獣や魚に対する依存度が高いことは、西浦項貝塚の出土資料に典型的に示される。この地域でも穀物の出土が報告されており、ザイサノフカ7遺跡などにみられるように、石鍬や石鋤が発見され、石庖丁が伴うことから一定程度の穀物栽培は行われていたことは確かであるが、生業活動の面では漁撈への傾斜が高かったことが、魚骨や各種の漁撈具により窺うことが可能である。これに対して内陸地帯にあるクロウノフカ遺跡では、狩猟動物の種類や数が少なく、またこの地域の小河川での魚種が少ないことから、農耕と採集活動への生業の面での依存度が高いことが想定できる。内陸地帯においては漁撈活動が不活発な状況にあるために、より植物性食料への傾斜が高いことがわかる。ロシア沿海州地域で最も古い穀物資料がクロウノフカ遺跡で検出されていることは、沿岸部より穀物栽培を導入する時期が早いことも、それを裏付けるものであるといえよう。

北朝鮮の内陸平野地帯に分布する新石器時代遺跡では、シカ科を中心とする狩猟活動も盛んであるが、青銅器時代にはいると家畜飼育が隆盛することとなり、シカ科の捕獲が減少するに併せるように、アナグマ、イタチ、カワウソなどの毛皮を供給する動物が全体の1/3を占め、これにクマなどを加えると遺跡出土哺乳動物の頭数が2/3近くになることは、穀物生産が安定期に入り、肉類の消費用にブタを飼育し、その余暇に交易用の毛皮動物の捕獲に重点を移動したのではないかと想定される（甲元1973）。

東北アジア内陸地帯の先史時代狩猟活動の対象は、北部地域ではアカジカが主で、ニホンジカやノ

ロジカが従、南部地域ではニホンジカが主でノロジカが従という組み合わせと生っている。ロシア沿海州から北朝鮮の日本海沿岸地域では、海獣の捕獲が一般的で、時代が新しくなるとともに、マグロなどの近海の大型魚へと捕獲対象の重点を移動している。それ以外の地域では狩猟活動はあくまでもその他の生業活動とバランスをとりながら行われていたことが推定できる。すなわち網羅的な経済活動類型（甲元1992）と見ることが可能である。これが青銅器時代に入り特定種への依存度が高まることは、穀物栽培が中心となる生業活動が展開するようになったことを物語るものである。

引用文献

日本語

- 及川民次郎1933「南朝鮮牧ノ島東三洞貝塚」『考古学』第4巻5号
大貫静夫1995「環渤海初期雑穀農耕文化の展開」『東北アジアの考古学研究』同朋舎出版
黒田長礼1940「原色日本哺乳動物図説」山省堂
甲元眞之1973「朝鮮の初期農耕文化」『考古学研究』第20巻1号
1987「東北アジアの石製農具」『古代文化』第41巻第4号、古代学協会
1991「東北アジアの初期農耕文化」『日本における初期弥生文化の形成』文献出版
1992「長江と黄河」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
1997「朝鮮先史時代の集落構造」藤本強編『住の考古学』同成社
玉貫光一1980『シベリア東部動物記』国書刊行会
東亜考古学会1938「赤峰紅山後」東亜考古学会
西原悦男1995「北東アジア陸生哺乳動物誌」鳥海書房
1998「北東アジア陸生哺乳動物誌Ⅱ」鳥海書房
三宅俊成1975「長山列島先史遺跡」『東北アジア考古学の研究』国書刊行会
横山将三郎 1933「釜山府絶影島東三洞貝塚報告」『史前学雑誌』第5巻4号
ルカーシキン1927「北満州野生哺乳動物誌」興安書院

朝鮮語

- 黄基徳1970「豆満江流域の青銅器時代文化」『考古民俗論文集』2集
1975「茂山虎谷原始遺跡発掘報告」『考古民俗論文集』6集
姜錫午1971『新韓国地理』新文社
漢陽大学校博物館1990「安眠島古南貝塚」第1次～7次発掘調査
金信奎1970「我が国原始遺跡から出た哺乳動物相」『考古民俗論文集』2集、朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学及民俗学研究所
1990「先鋒郡西浦項原始遺跡から出土した獣類について」『朝鮮考古研究』3号
金用珩1963「美松里洞窟発掘報告」『各地遺跡発掘報告』
金用珩・徐国泰1972「西浦項原始遺跡発掘報告」『考古民俗論文集』4集
国立晋州博物館1993「煙台島Ⅰ」
国立中央博物館1976「朝島貝塚」
孫宝基1982「上老大島の先史時代生活」修書院
朝鮮社会科学院考古学研究所1954「清津農圃原始遺跡発掘報告」『文化遺産』4号
朝鮮民主主義人民共和国科学院1955「羅津草島原始遺跡発掘報告」
朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学及民俗学研究所1957「弓山原始遺跡発掘報告」
1959「会寧五洞原始遺跡発掘報告」
釜山大学校博物館1981「金海水佳里Ⅰ」
李元均・白龍奎1962「平壤市勝湖区域立石里原始遺跡発掘簡略報告」『文化遺産』4号

中国語

韓有峰1991「鄂倫春族風俗志」中央民族學院出版社

吉林大學考古學教研室1989「農安左家山新石器時代遺址」『考古學報』2期

吉林省文物考古研究所1989「吉林農安元寶溝新石器時代遺址發掘」『考古』12期

黑龍江省博物館1961「黑龍江寧安火牡丹屯發掘報告」『考古』10期

黑龍江省文物考古工作隊1979「密山縣新開流遺址」『考古學報』4期

高耀亭編1987「中國動物志食肉目」科學出版社

張榮祖等1997「中國哺乳動物分布」中國農業出版社

趙復興1987「鄂倫春族研究」內蒙古人民出版社

肖增祐編1988「遼寧動物志 獸類」遼寧科學技術出版社

中國社會科學院考古研究所內蒙古工作隊1964「內蒙古巴林左旗富河溝門遺址發掘簡報」『考古』1期

1974「寧城南山根遺址發掘報告」『考古學』1期

中國社會科學院考古研究所·內蒙古自治區文物考古研究所·吉林大學考古系·赤峰考古隊1998「內蒙古喀喇沁旗大山前遺址1996年發掘簡報」『考古』9期

中國社會科學院考古研究所·內蒙古自治區文物考古研究所·吉林大學邊境考古研究中心·赤峰考古隊2004「內蒙古喀喇沁旗大山前遺址1998年發掘」『考古』3期

王立新2004「遼西區夏至戰國時期文化格局與經濟形態的演進」『考古學報』3期

齊烏雲2005「內蒙古大山前遺址花粉分析反映的夏家店下層文化時期自然環境」『新世紀的中國考古學』科學出版社

中國科學院中國自然地理編輯委員會1979「中國自然地理·動物地理」科學出版社

1985「中國自然地理」總論、科學出版社

趙正階1999「中國東北地區珍稀瀕危動物志」中國農業出版社

張鎮洪1989「建平縣水泉夏家店文化遺址獸骨研究」『考古與文物』1期

劉觀民·徐光冀1997「遼河流域新石器時代的考古發現與知識」『中國考古學會第一次年會論文集』文物出版社

遼寧省省博物館文物工作隊1983「遼寧林西縣大井古銅鋤1976年試掘簡報」『文物資料集刊』7集

遼寧省博物館·朝陽市博物館 1986「建平水泉遺址發掘簡報」『遼海文物學刊』2期

遼寧省博物館·旅順博物館·長海縣文化館1981「長海縣鹿島大長山島貝丘遺址」『考古學報』1期

英語

Komoto, M. et Obata, H., 2004 *Krounovka* 1. Kumamoto University

2005 *Zaisanovka* 7. Kumamoto University

Okladnikov, A. P. 1963 *Ancient Settlement of the Peschany Peninsula in Vladivostok*.

Andreeva, Z. V. ed. 1991 *The Neolithic of the Far East*.

Sample, L. L. Tongsamdog-A Contribution to Korean Neolithic Culture History. *Arctic Anthropology* 11-2.

Vostretsov, Y. E. 1998 *The First Fishers in Peter The Great Bay*.

Hunting Animals in Prehistoric Northeast Asia

KOMOTO Masayuki
Kumamoto University

An area to define as Northeast Asia here is North of Middle Hebei (河北省中部), East of Southeast Inner Mongolia and South of Amur River Valley (黑龍江流域). By Archaeological evidences, this area produces commonly deep bowl-shaped as a basic earthenware form. Stone net sinkers with notches on both sides are distributed widely in Northeast Asia, and not tubular sinkers that is related to the Chinese Neolithic Culture can be found in the Neolithic in this area. Subsistence economy bases mainly upon hunting, fishing and gathering with small dry field cultivation such as millets, red bean. The target of hunting activities focused on deer family like red deer and Japanese deer. The fishing in the inland riverine area intends for Amur huchen, salmon, lenok and sturgeon. The capture of a salmon became extremely important food resources for prehistoric people in winter. In coastal area of Russian Maritime Region and the east side of Korean Peninsula, sea mammals were hunted largely with harpoon and toggled harpoon. These implements were used for hunting sea mammals such as fur seal, sea lion, seal, whale and dolphin.

This paper is aimed to describe a general survey focused on hunting animals in prehistoric Northeast Asia based upon our joint research project. I examine an ecological adaptation system concerning to the hunting animal excavated from prehistoric remains, inspecting a process of transformation from daily necessities to a special product for trade.

At the Yuan bao gou site (元宝溝遺跡), deer family was main hunting targets in the North of the Northeast Asian inland rivers zone through Neolithic era. Deer family is 72%, and an animal offered to furs such as wolf, badger, fox, and Siberian mole mouse reaches 31% among the excavated mammals in Yuan bao gou remains. The deer family, 35%, a fur animal become 26%, domestic animals such as dog and pig being 13% in Xin kai liu (新開流遺跡) remains. There is overwhelmingly many deer family what is used for a bone implement cannot doubt that deer family was the dominant hunting target in Zuo jia shang (左家山遺跡) remains. The excavate materials show us that hunting of deer family in the forest and fishing in the river were main activities in Neolithic era in the North of the Northeast Asian inland riverine zone.

In the west of the Northeast Asia and the peripheral zone, much number of hunting of deer family is found at Xia jia dian lower culture stage (夏家店下層文化段階). But a few animals living a grassy open land are found at the same time. It is indicated that a deer family decreases when phytophagous animals like sheep and goat were predominance at the Xia jia dian upper culture stage (夏家店上層文化段階), because of climatic deterioration. We could not find a large stone spade that is a farming tool to till deeply, and it suggests that soil corrosion caused by deterioration makes prehistoric people impossible to continue a stable farming. The forest retreats for a chilly drying embodiment and having changed into the situation of a grassy open land, an element of farming decreases gradually at the Xia jia dian lower culture stage that hunting / domestic animal breeding

and farming cultivation were basic forms subsistence economy, and expansion of an element of live stock farming dependent on domestic animal breeding at Xia jia dian upper culture stage.

Foxtail millet and rice were cultivated in Liaotong Peninsula (遼東半島) 4000 years before, but abundant marine products food and mammalian remains show us that fishing and hunting activities were dominant in this area, prehistoric hunting does not amount to be broadly unbalanced in hunting range in specification species, and the Korean southern part coast area can seem to point out a similar situation. In the Korean inland zone of the Bronze Age, breeding of a pig is prosperous, and all kinds of deer family are hunted without any specific species through the year.

In the coastal areas from Russian Maritime region to North Korea, high dependence degree on marine mammal and a fish is shown in an excavated document of the Sepohang shell mound (西浦項貝塚) typically. As stone implements such as digging hoe and spade, reaping knife, threshing tool, and cereals are reported in Zaisanovka 7 and Krounovka remains, prehistoric people in this area engaged definitely a sort of cereals cultivation, but fishing was high in a respect of subsistence activity by various fish bones and many kinds of fishing tools. There is a few a kind and number of a hunting animal in the Krounovka remains produced from inland zone, and we can assume that Neolithic inland people depend highly on farming and collection activity in the alluvial plain near the river.

Hunting activity mainly on deer family is prosperous in the Neolithic remains distributed over North Korean inland plains zone. In the Bronze Age, breeding a pig becomes prosperous, and animals supplying furs such as a badger, a weasel, otter occupies 1 / 3 of whole, and it being it 2 / 3 if adding to bear. These facts are assumed that fur animal capture for trade is increase in the spare time owing to the high cereals production. As for the target of prehistoric hunting activity of Northeast Asia inland zone, red deer is important in the north area, and Japanese deer is secondary.

In the Korean Peninsula, Japanese deer is dominant target, and roe deer is next. Capture of a marine mammal is prominent subsistence activity from Russian Maritime region to North Korean the Sea of Japan coast. Hunting activity can estimate what was achieved in this area, keeping the balance with other subsistence activity strictly. At the South Korean Bronze Age, a target of hunting animal becoming a specified species shows that cereals cultivation becomes dominant subsistence activity owing to a stable cereals production such as various millets and rice.